

砲弾の出迎え

まともな道路はなく、砲弾であちこちにアバタのような窪みがあり、小さな橋も壊れたままである。

「ひどいな。金だけ取ってこれだけの道路とは。だが、壊すほうも壊す方だ。」JAMSのスタッフの一人が耳打ちして答えた。

「大声で言えないが、壊したのはうちのムーサーですぜ。でも何年も前のことです。確かに前より悪くなっている。戦争中の方がまだましでした。」

JAMSのスタッフの多くはかつてゲリラであった。中でもこの土地出身の猛者がおり、ソ連軍の侵攻直後、殺された肉親の復讐に村の青年たちを率いて数年にわたってゲリラ戦を展開し、大いに敵を悩ませた。私の指さした破壊された橋梁は、ソ連軍の一個小隊が通過するのを見計らって彼が敵兵もろとも爆弾で吹き飛ばした残骸だった。運転をしていた当のムーサーは、照れくさそうに頭をかきながら言った。

「戦争は戦争でさ。自分も好きこのんでやった訳じゃありませんや。でも、あの頃はみんな純真だった。俺たちは自分で自分の村を守るだけでした。今の党派はムジャヘディン（聖戦士）じゃありませんぜ。しこたま金をアングレーズ（米英）から貰ってるビジネスマンなんだ。イスラム教徒のかざかみにも置けませんや。」

「俺はイスラム教徒ではないぞ。アングレーズと同じカーファイル（異教徒）だぞ。」

「ドクターは別だ。もう同郷人ですぞ。本当のイスラム教徒かどうか決めるのは神様の仕事でさ。神様が二つも三つもあっちゃ、収まりませんや。油成金（アラブ）もアングレーズも、神様が見て怒りませぬぜ。」



確かにその通りで、単純かつ健全な意見であった。ちょうど湾岸戦争の真つ最中で、ペシャワールで見たテレビの映像には、イラクのフセイン大統領がメツカに向かって祈り、米国のブツシュ大統領は教会で祈る姿が映し出されていた。おかしな話ではあった。

葬儀の予定場所から二・五キロメートル先にはアフガン政府軍の陣地があり、依然として厳しい戦闘が続いていた。陣地はクナール渓谷からジャララバードに向かう要衝で、二年前一旦陥落したが、軍資金に困ったゲリラ党派が再びカブル政権に売り渡したというのが専らの噂である。確かにゲリラ勢力の組織化と党派の肥大は、国連組織や難民援助団体と同様、「解放」される住民を置き去りに自己運動していた（この事実はそれから一ヶ月後に別の政府軍要衝都市が陥落した際に、非戦闘員の市民一万人が虐殺されるに及んで、我々と難民たる住民を戦慄させた）。

近づくにつれて鈍い砲声が大きくなった。完全に射程距離に入っていた。これ以上近づくなという制止を聞かずに、懐かしさを押さえ切れぬ一部の住民が自分の家を見るために前進した途端、砲弾の出迎えを受けた。狙いは正確で、目測で自動車から八十メートルの所に落下して轟音と黒煙が上がり、肝をつぶした。あわてる者を叱咤して直ちに山陰に車両を誘導した。幸いに負傷者はいなかった。日章旗と赤三日月（イスラム社会では赤十字に相当する）のマークを認めたのか、ただの威嚇だったのか、砲撃は停止した。

翌日の式を前に我々は遺族の家に備わる荒れた礼拝場に集まり、メツカに向かって祈りを繰り返した。礼拝が終わった頃には、既に時計は午後六時を回っていた。廃墟と化した家には宿泊施設もなかった。砲弾を避けるためにダラエ・ヌール渓谷をやや遡行して野営した。灯火管制の下、我々は月光を頼りに山沿いの悪路を迂回せねばならなかった。



宿泊した村落は大きな山陰で遮蔽されて安全であった。ここでは噂はジープの速度よりも早い。既に葬儀の準備を整えた村民たちが質素だが十分な食事と笑顔で我々を迎えた。JAMSの進出は明らかに村民たちに希望を与えていた。聞けば、JAMSのスタッフの出身地の村である。廃村に近かったが、ゲリラ組織の一拠点として利用されておき、幾人かの地元民もいた。熱いチャイをすすりながら、我々は久々に牧歌的で和やかな一夜を過ごした。

満月が近かった。中天高く、月光が遠くの山並みを白屏風の如く浮き立たせていた。政府軍陣地方面で時折照明弾らしいものが邪魔する以外は、月明かりが平和な村落に和やかな光の粉を隅々までまぶしているようでもあった。それは廃墟さえ美しく装わせる自然の幻想的で不思議な光景である。戦争も、難民も、ペシャワールの喧噪も、嘘のようであった。影絵のように浮き立つ山並みのふもとがヌーリスタンの南部で、我々の標的地の一つであった。山々は五年の時を待ち続けた我々にも、十年ぶりにふるさとに戻った者にも、同様に尽くしがたい感銘を与えていた。

